

Memo

「1972年卒業生が学生生活を送った時代」

2023.9.23

富田 隆（文学部教育学科）

私たちはいわゆる「団塊の世代」の最後に位置するベビーブーマーです。

これらの世代の数の多さは日本の経済に少なからぬ影響を与えました。

VAN や JUN などのファッションブランドを着こなしたおしゃれな若者たちが原宿などを闊歩するようになったのもこの時期です。

団塊世代の消費需要に合わせ、次々に新たな市場が生まれたのです。

ですから、私たちの成長に合わせるかのように、日本の経済も成長して行きました。

私たちが3年生となった1970年は大阪で「万国博覧会」が開催された年であったのと同時に、「日米安全保障条約」が改訂される「70年安保」の年でもありました。

日本経済が繁栄を迎えた「経済の季節」は、若者たちにとっては「政治の季節」でもあったのです。

海の向こうのベトナムでは米軍と北ベトナム軍の戦争が続いており、多くの同世代の若者が命を落としていました。

「ベトナム反戦」の気運は世界中に拡がり、アメリカやヨーロッパでは学生を中心に大規模な「若者の反乱」が引き起こされたのです。

日本も例外ではありませんでした。

そして我が上智大学においても、1968年6月に始まった「学園紛争」は全学共闘会議（全共闘）による全学バリケード封鎖へと発展し、授業が開けない状況が3か月以上続きました。

教室を追われた学生や教師は、真田掘グラウンドの芝生に腰を下し、臨時の「青空教室」を開いたこともあります。

封鎖が長期化するにしたがって、近隣の会議室などを学生が借りて教師を招き「自主授業」も行われました。

ほとんどの学生は「ベトナム戦争」に反対であり、「日米安保条約」にも疑念を持っていました。

しかし一方では、全共闘の過激な路線に賛同する者は少なく、多くは授業の再開を望んだのです。

ヘルメットと「ゲバ棒」で武装した全共闘は、「革命」を標榜し、大学を「闘争拠点」

に変えようとしていましたが、そうしたやり方に批判的な学生の方が多数派だったので、

各クラスから選出された代表が集まる「代議委員会」でも穏健派が過半数を取り戻しました、全共闘は少数派となることで、ますます先鋭化して行きました。

政治的な方法論の違いは学生間の対立を生み、キャンパスのあちこちでは討論の輪が現れました。

穏健な大学改革案を支持する代議委員会は、バリケード封鎖の解除を決議しましたが、校舎の占拠を続けていた全共闘はこれを拒否し、両者のぶつかり合いが負傷者を出す事態を招きました。

12月に入って、守屋美賀雄学長は機動隊導入を要請、バリケード占拠を続ける学生を排除し、全学封鎖（ロックアウト）を行いました。

授業再開の目途はつかず、立ち入り禁止のロックアウトが続く中、2月には入学試験が実施されました。

結局、1969年の4月には授業が再開され、その後、校舎のバリケード封鎖といった事態は繰り返されませんでした。

しかし、全共闘などの「闘争」は依然として活発で、学内には政治的スローガンを書いた「立て看板」が乱立し、代議委員会や全学大会などの場では怒号が飛び交い、「実力行使」も繰り返されました。

このように、私たちの大学生活は対立と混乱の4年間でした。

しかし、それが無駄だったとは思いません。

自分と異なる世界観や政治思想を持った学友との議論を通じて、私たちは多くのことを学んだのです。

多くの学生は、自分の専攻分野以外の本も読むようになりました。

社会の問題にも目を向けるようになりました。

「もっと勉強しなければ」という動機付けも高くなりました。

キャンパスには「活気」が溢れていました。

当時の理事長ヨゼフ・ピタウ神父様の言葉を思い出します。

彼は、紛争の続くキャンパスを見ながらこう仰ったのです。

「対立やぶつかり合いがあることは良いことです。それはこの大学が『生きている』こ

との証（あかし）だからです」